

# 金剛砂が生んだ工芸美「ふたかみ窯」

タウンウォッチャー  
米永 繁夫 (良福寺)  
畠山 欣也 (関屋北)



釉彩金ラスター

太古の昔、数次にわたる二上山山の活動によって形成されたさくろ石が低地に沈積し、生み出した赤褐色の金剛砂。多量に産出する所は、日本ではこの二上山麓一帯だけという貴重な地下資源であります。主に穴虫から逢坂にかけての竹田川流域などで採掘されてきました。

特に二上山の金剛砂は鉄分を三六%含んでおり、モース硬度が、六・五〜七・五(ダイヤモンドが十)で硬さと粘りがあり、古くから鏡や玉を磨くのに用いられこれを塗布したサンドペーパーは香芝市の地場産業として根づいています。興味深いことはこの金剛砂が、室町時代には京都御所の敷石に使用されたり、第二次世界大戦では飛行機の砲弾ガラスの研磨にも使用されたことです。さらには、国会議事堂の大理石を磨くのにも使用されるなど数々の歴史を経て現在に至っていることです。

そして古今活躍してきた金剛砂は、昭和五七年、新規開発用途を目指して組合員有志の方たちが発足した「コンセラ(金剛砂とセラミックの意)研究会」によって装飾品が生み出されました。平成三年からは、釉薬(つわくすり)掛け、本焼をした陶磁器、すなわち二上山の鉱物「金剛砂」を釉薬に使った新しい芸術「ふたかみ窯」が誕生したのです。

あれほど研磨材でしかなかった金剛砂が、こんなにも美しい窯として生まれるとは思いませんでした。現在、金ラスター、銀ラスター、あめ紫、なまこ、茶そば、青そばといった六色の種類ものふたかみ窯があるそうです。

今回タウンウォッチャーになって初めて知る事ができた「ふたかみ窯」の存在、こういった未知なる産業、文化などがこの香芝市にはまだまだあると思います。こういった機会を設けて、市民の皆さんにも「自分のまちの再発見」といったテーマを持ち、もっともっと自分たちが住んでいる地域のことを知ってもらいたいです。



ふたかみ窯の製作中(撮影/畠山欣也)